

大和国絵図に描かれた大峰

——山岳聖域に関する地理的知識伝播の一例——

小 田 匡 保

I. はじめに

筆者は、かつて「山岳聖域大峰に関する地理的知識の展開」というタイトルで口頭発表をしたことがある¹⁾。この報告についてはまだフルペーパーをなすに至っていないが、かいつまんでその内容を記せば、修験道の聖域である大峰に対して非修験者が有していた地理的知識には、時期的に、『山家集』的知識の段階、『大和志』の段階、『大日本地誌』・五万分一地形図の段階を見いだすことができる。ここで2番目に名前が出てくるように、享保21年(1736)の『大和志』の刊行は、大峰に関する外部者の地理的知識の増大にとって大きな意味をもつものであったと筆者は考えている。

ところで、この前年の享保20年(1735)に出版された『大和国細見図』は、『山家集』的知識の段階内に位置づけたものの、『山家集』や延宝9年(1681)の『大和名所記』にまさる地名の情報量を有している。先の報告ではこの点を不問に付しておいたが、山岳聖域大峰に関する地理的知識の展開を考察するうえでは、初期の版行国絵図でもある享保版『大和国細見図』について、十分な検討をしておく必要がある。

享保年間を含む宝永～宝暦期(1704～1764)の刊行国絵図に関しては、従来、幕府撰正保国絵図との関連が指摘されてきている²⁾。享保版『大和国細見図』も、やはり正保国絵図の影響を受けているのであろうか。本稿は、享保版『大和国細見図』に見られる大峰の地理的知識の淵源について、江戸幕府撰国絵図との関係から明らかにすることを目的とする。あわせて、近年国絵図研究が学界の関心を集めていることにも鑑みて、幕府撰大和国絵図に大峰がどのように描かれているかについても触れておくことにしたい。

II. 版行大和国絵図にみる大峰

1. 版行大和国絵図の概要

享保20年(1735)刊『大和国細見図』の話題に入る前に、版行大和国絵図の概要について述べておく。大和国に限らず、近世には日本各地で多種多様な民間の国絵図が刊行されている。三好³⁾によれば、68カ国中40カ国に刊行図が見られ、刊年の明らかなものは宝永6年(1709)から

始まるという。大和国については、神戸市立博物館所蔵南波コレクション中に、題簽の違うものも含めて、7種類の版行図が確認されている⁴⁾。このうち、最古の享保3年(1718)刊『大和国絵図』(藤川治古版)⁵⁾には大峰の描写はなく、また享保19年(1734)刊の石川春栄作の絵図2種および刊年・作者不明の小判の『大和国』絵図は未見であるので、大峰の描かれた筆者実見の刊行大和国絵図は次の三つである⁶⁾。

- A『大和国細見図』, 享保20年(1735)。外題は「大和国大絵図」。
- B『大和国細見図』, 安永5年(1776)。外題は「大和国細見絵図」。
- C『嘉永増補改正大和国細見図』, 嘉永元年(1848)。外題は「嘉永増補改正大和国細見之図」。

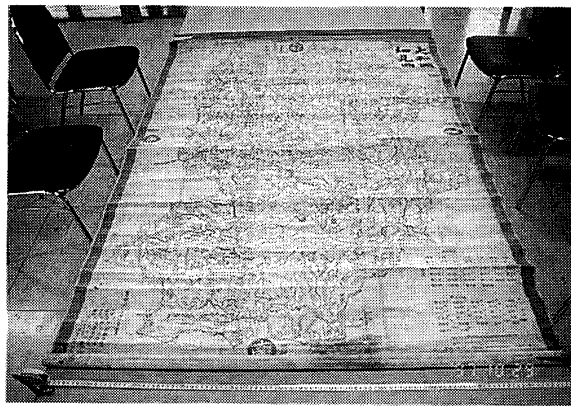


写真1 享保20年刊『大和国細見図』(奈良県立奈良図書館蔵, 絵図番号106)

A図(以下「享保版図」と略称する, 写真1)は和州の中村敢耳^(ママ)齊の作, 大坂の裕山才春堂の校合で, 大坂心齋橋の誉田屋伊右衛門の開板である。B図(以下「安永版図」と略称する)は享保版図(A図)の改訂版であり, 同じ作者・校合者のまま, 大坂心齋橋筋の塩屋平助と河内屋喜兵衛から出されている。C図(以下「嘉永版図」と略称する)は安永版図(B図)をさらに大規模に増補改訂したもので⁷⁾, 江戸日本橋の須原屋茂兵衛, 京都堀川の越後屋治兵衛, 南都の住屋林助, 大坂心齋橋筋の河内屋喜兵衛・河内屋徳兵衛という五つの書肆から出されている。関係書肆の数・場所から, 絵図の流通のひろがりが見取されるが, 識語にある「積玉圃」が河内屋喜兵衛の号である⁸⁾ことから, 絵図の作成は河内屋喜兵衛の手になるものと思われる。

さて, これらの絵図に記載されている大峰の地名を見てみると, 享保版図と安永版図はまったく同一であるが, 嘉永版図では約2倍に増加している。これら相互の比較および嘉永版図の詳細については別稿を期すこととし, 本稿では以下享保版図に着目する。

2. 享保版『大和国細見図』にみる大峰

第1表の左列は, 享保版図中に記された大峰の地名(厳密に言うと文字注記⁹⁾)を, おおよそ

北から南の順に並べたものであり、第1図は享保版図のトレース図である（第1表とは南北が逆になっている）。山脈中の峰々の他、山上ヶ岳（以下、近世の呼称に従って「山上」と記す）の行場（鐘掛、西の覗き、平等石、東の覗き）や宗教施設なども記入されている。表中の△の記号は、絵図中にも付されているもので、おそらく山であることを表示であろうが、岩塊である鐘掛に△の記号がある一方で、「セン日嶽」にこの記号がないなど、必ずしも正確ではない。地名の右側の矢印は、北を上にした場合の文字の方向（どちらを文字の頭にしているか）である。大峰全体としては、北からの視点、すなわち大和平野からの視点で描かれていることがわかる（山容も、全体的にはこれとほぼ同じである）。この一般的傾向にあてはまらないもののひとつが、山上の地名の一部であり、東ないし南東を上になっている。これは、北西麓に位置する登り口の洞川集落からの視点である。また、「セン日嶽」は東、玉置山権現は南方向から描かれており、部分的にはそれぞれの山麓からの視点がまじっているとと言える。

地名の配置については、釈迦嶽以北と大日嶽以南の間が大きく離れているのが特徴的である¹⁰⁾（写真2）。この範囲には大きな山容も描かれておらず、絵としても南北に連なる山脈の体をなしていない。北の釈迦嶽を主峰とする山々と、南の地藏嶽を中心とする山々が、まったく別個に存在しているかのような描写である。また、玉置山権現も南端に孤立して書かれており（しかも文字の方向は他と逆である）、北の地藏嶽との間には連続性を感じさせる大きな山々はない。さらに、山上と吉野山の間も無名の低い山々があるのみで、吉野山からはまったくアプローチがないように描かれている。そのかわりに見られるのが洞川からの通路で、道は「籠所」の脇を通り、山上蔵王堂にまで達している。このことが山上の地名の向きに影響を及ぼしていることは、前述のとおりである。

以上のように、享保版『大和国細見図』において大峰は、吉野山から玉置山に至る一続きの山脈というよりも、山上～釈迦嶽間の山々のグループと、地藏嶽を中心とする山々のグループの二つに分かれて描かれており、視点は基本的には大和平野から望む方向にある。他方、「セン日嶽」や玉置山権現のように、周辺山麓からの視点もおりこまれている。

Ⅲ. 幕府撰大和国絵図にみる大峰

1. 幕府撰大和国絵図の概要

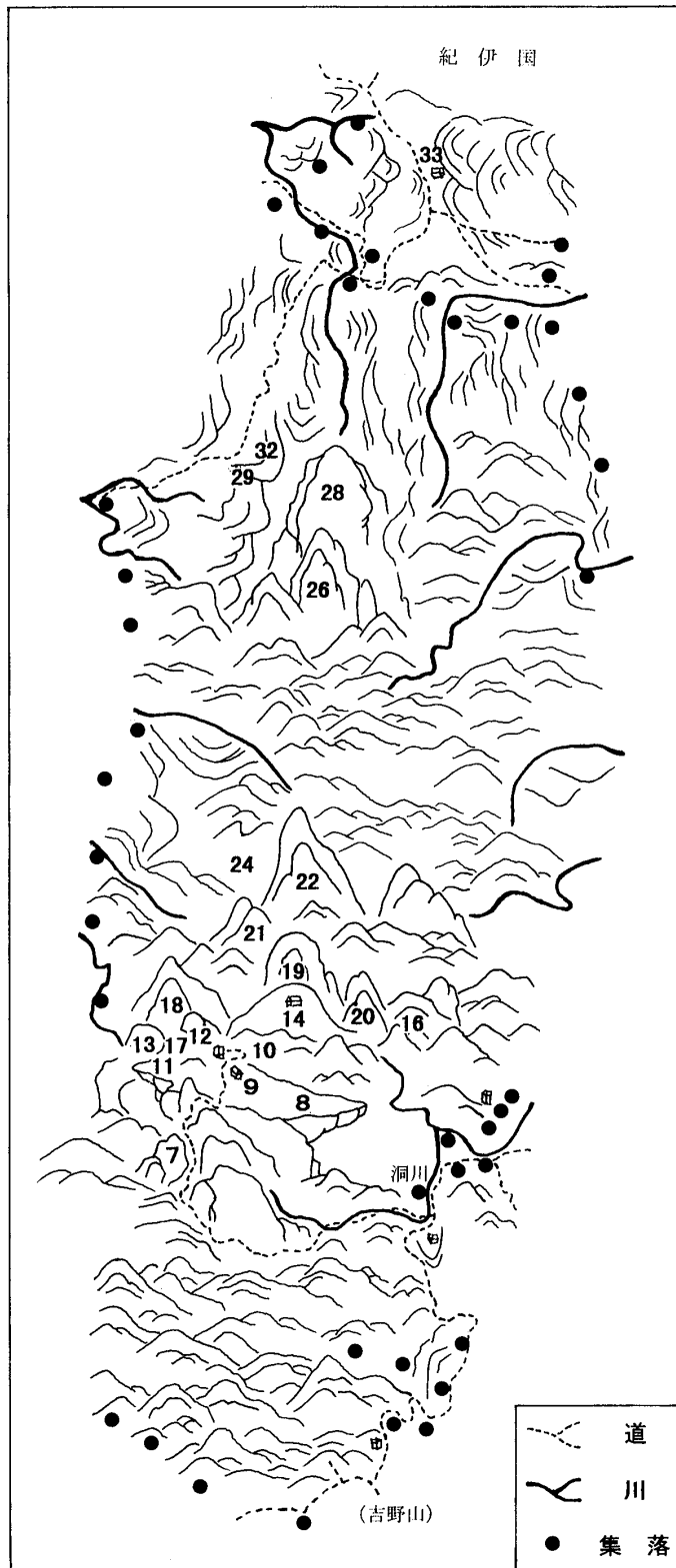
次に、本章では江戸幕府撰大和国絵図について検討したい。磯永¹¹⁾によれば、現存の幕府撰大和国絵図（もちろん控図や写図であるが）には、正保時の絵図として名古屋市蓬左文庫のもの、元禄時の絵図として奈良県立奈良図書館、天理図書館、十津川歴史民俗資料館（十津川領分のみ）のもの、天保時の絵図として奈良県立奈良図書館、天理図書館のものがあるという。筆者はこのうち、奈良県立奈良図書館所蔵の元禄・天保国絵図と、磯永の報告にはないが、正保時

第1表 近世の大和国絵図に記載された大峰関係の文字注記とその方向¹⁾

番号	『大和国細見図』 (1735年)	正保国絵図 (1648年)	元禄国絵図 (1699年)	天保国絵図 (1838年頃)
1	—	—	吉野ヨリ大峯へ山伏道 ↑	吉野 [△] 大峯江山伏道 ↑
2	—	藓嵩 ↓	—	—
3	—	足摺 ↓	—	—
4	—	小天上 ↓	—	—
5	—	大天上 ↓	—	—
6	—	飛石 ↓	—	—
7	△カ子カケ ↓	鐘掛 ↓	かねかけ ↓	同左 ↓
8	西ノノゾキ ↓	西ノ除 ↓	西のそき (2カ所) ↓	同左 (2カ所) ↓
9	※籠所 ²⁾ ↘	※菅所 ↓	※籠所 ↓	※同左 ↓
10	※山上蔵王堂 →	※山上蔵王堂 ↓	※山上蔵王堂 →	※同左 →
11	東ノゾキ ²⁾ →	東ノ除 ↓	東のそき ↓	同左 ↓
12	平等石 ↘	平等岩 ↓	平等岩 ↓	同左 ↓
13	シヤカ岩屋 ↓	筮岩 ↓	しやうの岩や ↓	しやうの岩屋 ↓
14	※小サ、・護摩所 ↓	※大峯 ^(ママ) 護麻所・小笹ノ宿 山上ヨリ五十丁 ↓	※小サ、・護 ^(ママ) 所 ↓	※小サ、・護摩所 ↓
15	—	※小池 ↓	—	—
16	七面 ↓	七面 ↓	七面 ↓	同左 ↓
17	御山 ↓	※御山嵩 小笹ヨリ九里八丁山伏道 ↓	御山 ↓	同左 ↓
18	△行者帰 ↓	—	行者帰 ↓	同左 ↓
19	△行山 ↓	—	行山 ↓	同左 ↓
20	△チャウセン ↓	—	ちやうせん ↓	ちうせん ↓
21	△イナムラガ嶽 ↓	稲村カ嵩 ↓	いなむらか嶽 ↓	同左 ↓
22	△釈迦嶽 ↓	大峯釈迦嵩 ↓	釈迦ノ嶽 ↓	釈迦嶽 ↓
23	—	小釈迦嵩 ↓	—	—
24	前牛五鬼居所 ↓	※前久五鬼カ在家 ↓	前牛五鬼ノ住所 ↓	前牛五鬼住所 ↓
25	—	子稲嵩 ↓	—	—
26	△大日嶽 ↓	大日嵩 ↓	大日ノ嶽 ↓	同左 ↓
27	—	千手嵩 ↓	—	—
28	△地藏嶽 ↓	地藏嵩 ↓	地藏か嶽 ↓	同左 ↓
29	大峯山伏道 ↓	大峯山伏道 ✓	大峯ヨリ山伏道 ↓	大峯 [△] 山伏道 ↓
30	—	※行仙堂 ✓	—	—
31	—	天狗嵩 ↓	—	—
32	セン日嶽 ←	仙人嵩 ↑	せんが嶽 ←	せんか嶽 ←
33	※玉置山権現 ↑	※玉置神社 ↑	※玉置権現 ↑	※同左 ↑
34	—	—	—	大水呑 →
35	—	—	—	大峯道 ✓
36	—	—	—	かぶち辻 ↓

1) 文字注記はおおよそ北から南の順に配列した。ただし、文字注記の配置には絵図によって若干の相違があり、ここでは正保国絵図の描写を基準とした。△は絵図中にも△の記号があるもの、※は絵図中に建物の絵があるものである。

2) 絵の方向は↓である。



第1図 享保20年刊『大和国細見図』における大峰の描写（トレース図）
 注）番号は第1表に対応する。道・川・集落の記号は原図と異なる。
 方向は下が北。第2図，第3図も同様。



写真2 享保版『大和国細見図』の山上～地藏嶽部分
注) 下が北

大和国絵図

今此図正保三^(成カ)戊年(1646)本多内記殿御家来服部九郎兵衛矢野武左衛門植村出羽守殿御家来岡田太左衛門蜂須賀助左衛門国中村々順見而立横ニ繩引村々町間帳面へ記之慶安元子年(1648)上ル御絵図ノ移南都御図ニテ写之宝永三^(ママ)戊年^(成カ)(1706)四月十五日殿様ニ上ル図之扣ニテ写シ申候尤他借被成間敷候已上

享保四亥(1719)十二月十日 北月峯

広瀬佐次右衛門様

正保3年当時、本多氏は郡山藩主、植村氏は高取藩主であることから、この両藩のもとで正保国絵図の作成が行なわれ¹³⁾慶安元年に完成した¹⁴⁾こと、その控えを宝永3年に写し、それをさらに享保4年に写したことがわかる。ただし本図は、紙質や色合いから判断すると、享保4年の写図をもっと後の時代に写したものと思われ、明治以降の写しの可能性もある。北東隅には「十五郡色付之事」(写真5)があり、15郡の色分け・郡高¹⁵⁾が記されている(村数はない)。また、西側から北西角にかけて領主ごとの知行高目録が記載されており、最小は高2石3斗のものまである。描法は、濃い緑青色で描かれた山々の中に、険しい岩塊の絵を橙色で多く書き込んであるのが特徴的である。大きさは、筆者の計測によれば、南北方向が479cm、東西方向が336cmである。

一方、奈良県立奈良図書館所蔵の元禄国絵図¹⁶⁾(写真6)は、裏書きに「元禄之度御改正 天保七年丙申(1836)五月修復之」とあるように、元禄時の絵図を天保時に修復したものである。南東角には「大和国高都合并郡色分目録」(写真7)があり、15郡の色分け・郡高・村数および

のものと思われる奈良女子大学附属図書館所蔵の国絵図を実見する機会を得た。享保20年(1735)刊『大和国細見図』中の大峰の描写と幕府撰国絵図中のそれとの関係を探るといふ本稿の趣旨からすると、時代の新しい天保国絵図は考察するには及ばないものであるが、大峰に関する地理的知識の展開という筆者本来の問題意識からすればこれもやはり重要な資料であり、あわせて検討することにしたい。

まず、時代順に絵図の概要を紹介しておく。奈良女子大学附属図書館所蔵の国絵図¹²⁾(写真3)は、寡聞にしてこれまで研究された例を聞かないが、正保国絵図の写しと思われる。本図の南東隅には、次のような識語(写真4)が記されている(括弧内の西暦は小田、以下の引用も同様)。

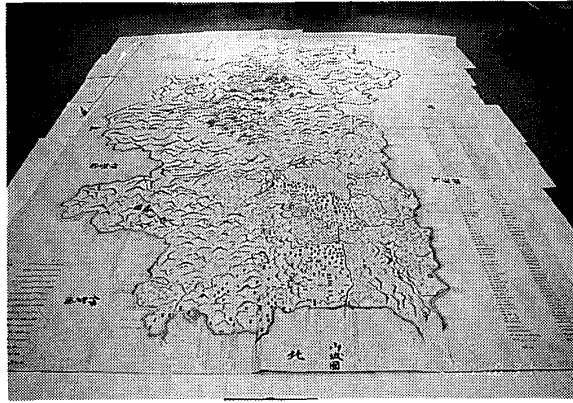


写真3 正保大和国絵図（奈良女子大学附属図書館蔵）

注) 左下に見えるのが色分目録，右側に見えるのが知行高目録，手前が北

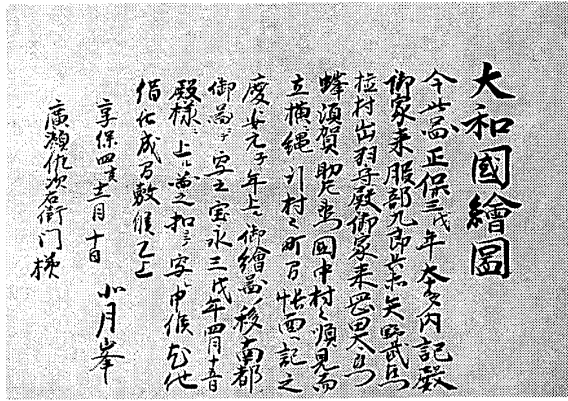


写真4 正保大和国絵図の識語



写真5 正保大和国絵図の色分目録

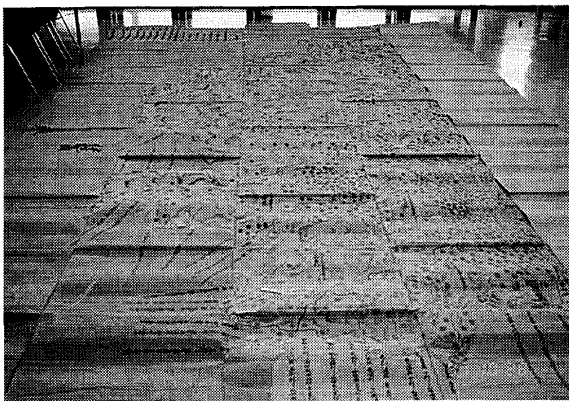


写真6 元禄大和国絵図（奈良県立奈良図書館蔵）

注) 左上に見えるのが色分目録，手前が北。
右側は，部屋が狭いため，折りたたんである。

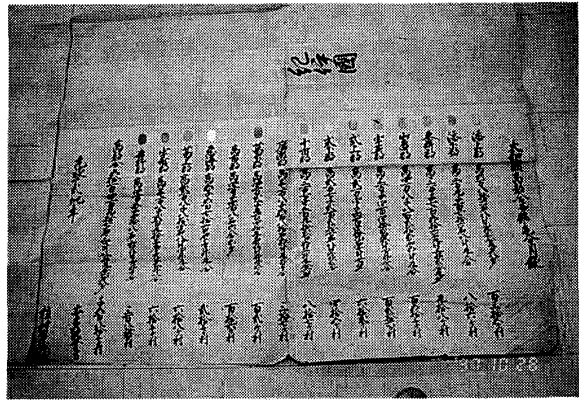


写真7 元禄大和国絵図の色分目録

大和国全体の石高・村数を記した後、最後に「元禄十式己卯年（1699）本多能登守 植村右衛門佐」とある¹⁷⁾。郡高は元禄郷帳¹⁸⁾の数値とほぼ一致し、正保国絵図の目録記載のものに比べて増加している郡が多い（とくに吉野郡は4万5048石6斗3升1合で、9000石以上の増加である）。山容は薄い緑色で描かれ、岩塊も丸味を帯びて薄い水色でやさしく書かれている。大きさは、奈良県立奈良図書館作成の「絵図地図目録」によれば578×378 cm（南北方向が長辺）である。

また、奈良県立奈良図書館所蔵の天保国絵図と考えられるものは、大和国を9分割した横長の9枚の図からなっている¹⁹⁾（写真8）。それぞれの大きさは、南北方向が約55 cm、東西方向が約315 cm²⁰⁾

である。識語・年号などは見られない²¹⁾。上記の元禄国絵図に比べて、国境付近の注記がかなり詳しいのが特徴である。他方、元禄図の村形内にあった村高は本図にはない。色合いは、元禄図では淡い緑で描かれていた山々が濃い緑になり、村形の彩色（たとえば吉野郡は赤）が省略されている。短冊形の残存形態²²⁾や描写内容から判断して、天保国絵図の写しと見てよいであろう。



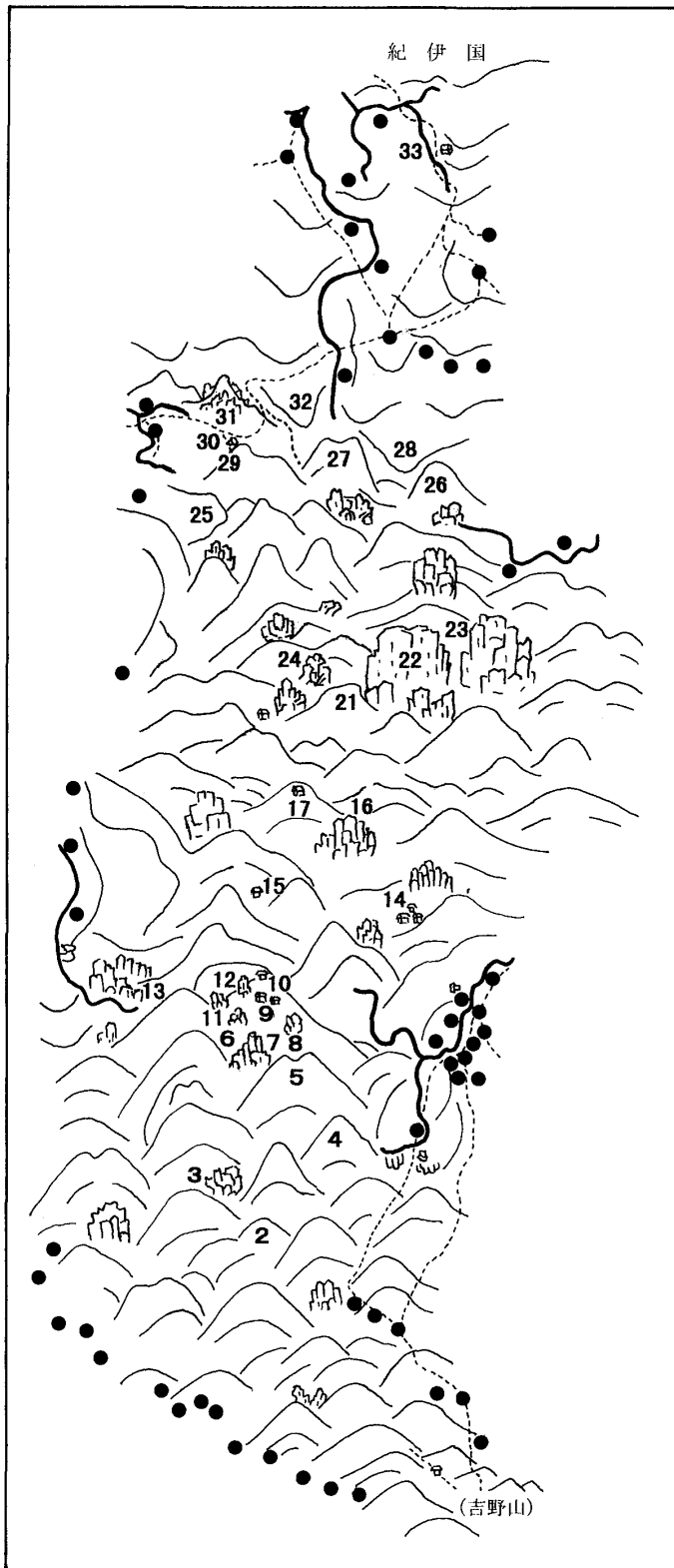
写真8 天保大和国絵図（奈良県立奈良図書館蔵）
注）9枚のうち最南端部分，右が南

2. 幕府撰大和国絵図に描かれた大峰

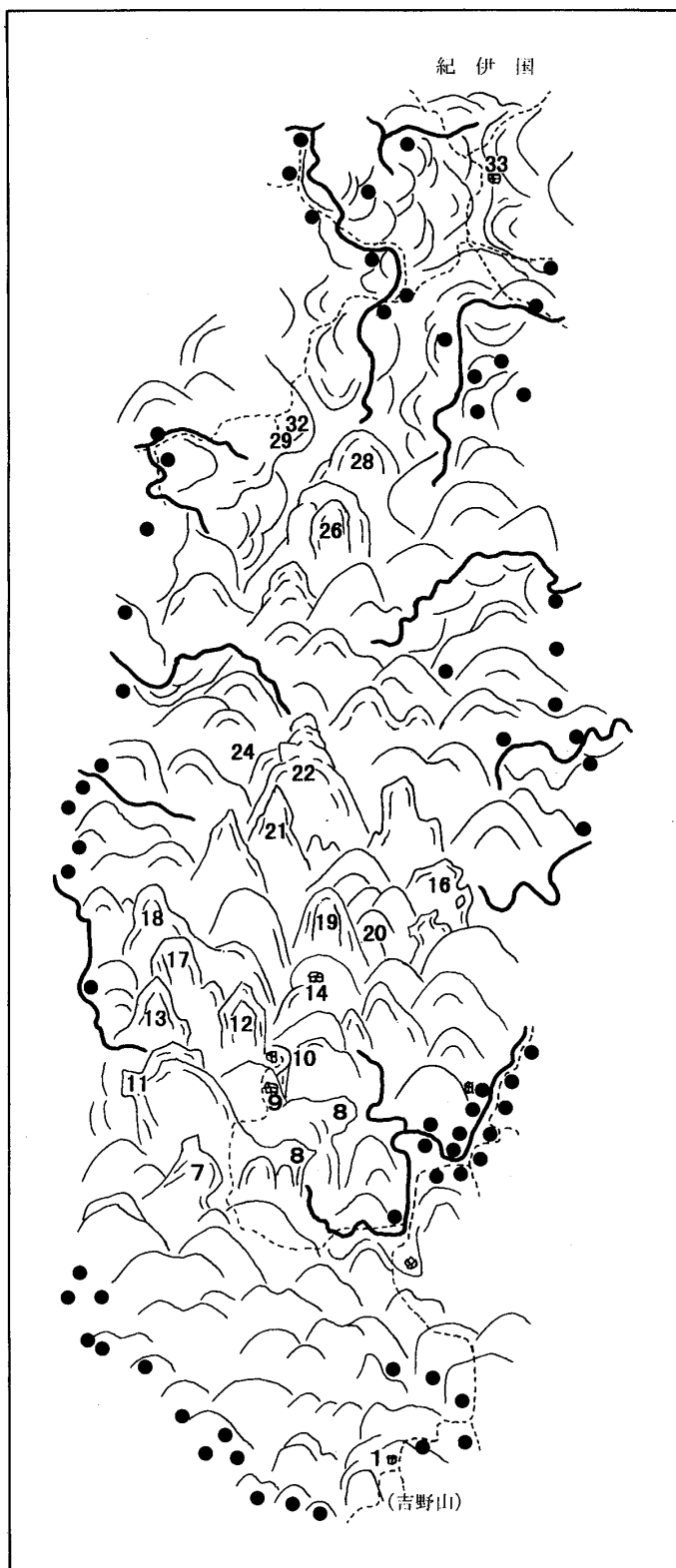
では次に、幕府撰国絵図に大峰がどう描かれているか見てみることにしたい。享保版『大和国細見図』と同じく、3種の国絵図中に記された大峰関係の地名・文字注記を第1表に示した。右側の矢印も同様である。また、正保・元禄両国絵図における大峰の描写を、第2図・第3図にトレースした。

山上の行場や峰々の名前が記されていること（写真9、写真10、写真11）、大和平野からの視点が主であることは三者とも同じであるが、元禄図と天保図の近似に比べて、正保図中の地名がかなり異なっていることがわかる。地名配置については粗密があるものの、山容はどの図も連続している。

元禄図と天保図の類似は、変地のみ修正という天保図の作成方法からして充分うなずけるものであり、書写の際に生じたと思われる微細な相違がほとんどである。新たに書き加えられたのは、大峰の南端すなわち紀伊国との国境付近の地名であり、「大水呑」、「大峯道」、「かぶち辻」²³⁾の名が入っている。実はこれらの注記は、元禄図にも付箋で貼付されており、天保図作成の際に元禄図が参照されたことがわかる（写真12、写真13）。その他、「大水呑」付近には



第2図 正保国絵図における大峰の描写（トレース図）
 注）記号は第1図と同じ。



第3図 元禄国絵図における大峰の描写（トレース図）
注）記号は第1図と同じ。



写真9 正保国絵図の御山嵩～仙人嵩部分
注) 下が北



写真10 元禄国絵図の山上～釈迦嶽部分
注) 下が北



写真11 天保国絵図の小笹～釈迦嶽部分
注) 下が北

「此所峯通国境紀伊国ニ而は大水呑堂屋舗と唱申候 是はかふち辻迄之間国境伝ひの道有」, また「かぶち辻」には「此所峯通国境紀伊国ニ而は野頭と唱申候 上葛川村は紀伊国霧渡村迄五里拾町 是はやけ尾越道迄之間山国境不相知」と記されており, 隣国での呼称, 国境の位置, 隣国集落への距離など, 紀伊国との国境付近の記載が非常に詳しくなっているのが, 元禄図にはない特徴である²⁴⁾。

次に正保図と元禄図を比べてみると, 元禄図では四つの注記が増える一方で, 11の地名が消え, 全体としては情報量が減少している。消えた地名は, 北から「蘚嵩」, 「足摺」, 「小天上」, 「大天上」, 「飛石」²⁵⁾, 「小池」²⁶⁾, 「小釈迦嵩」, 「子稻嵩」²⁷⁾, 「千手嵩」, 「行仙堂」²⁸⁾, 「天

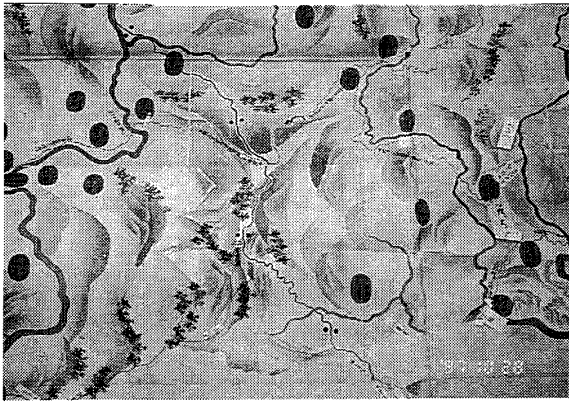


写真12 元禄国絵図の玉置山部分
注) 手前が南

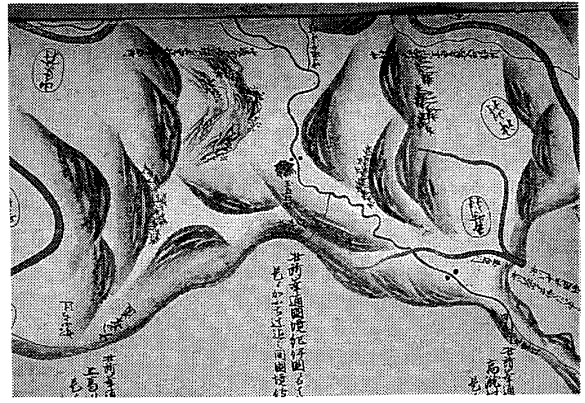


写真13 天保国絵図の玉置山部分
注) 手前が南

狗嵩²⁹⁾である。「藪嵩」と吉野山の間は正保図においても離れていたが、元禄図で「大天上」など山上から吉野山にかけての地名四つすべてが消えることにより、ますます両者は無関係であるかのように描かれている。また、大峰南部の記載も山名を中心に簡略化され、山上～小笹～御山(弥山)間の距離に関する注記もなくなっている³⁰⁾。一方、新しく書き込まれた文字は、「吉野ヨリ大峯へ山伏道」の注記と「行者帰」、「行山」、「ちやうせん」の3地名である。前者の注記については、大峰南部の注記「大峯ヨリ山伏道」とセットで大峰の入口と出口を示すことになり(南端の出口ではないのだが)、「大峯」の範囲をおぼろげながら明示する役割を果たしている。実際、「大峯ヨリ山伏道」の注記と「せんが嶽」以南には、「玉置権現」までいくつかの村形や道が描かれ、玉置山が「大峯」の一部であるという印象を与えない。後者の「行者帰」ほか3地名は、いずれも図上の位置的には、「小さく」、「御山」と「いなむらか嶽³¹⁾」の間にある。正保図では、「御山嵩」と「稲村カ嵩」の間に山塊の小さな切れ目があったが(写真9)、ちょうどその隙間に三つの地名が入った格好になる(「御山嵩」の北西に描かれていた「七面」も、「ちやうせん」の南西に移動している)。これによって、山上から「釈迦ノ嶽」までが一体となって表現されている。

ところで、ここで「ちやうせん」と「行山」が同時に付け加えられたことは非常に興味深い。なぜならば、現在国土地理院の地形図に記載され、七十五靡のひとつにもなっている頂仙岳のルーツがここにあるのではないかという発想に至るからである。頂仙岳は、現在のその知名度にもかかわらず、近世の入峰記録や七十五靡一覧(筆者が『大峯細見記』型と呼ぶもの)にはまったく名前が出てこない³²⁾し、実際にもはっきりしたピークではない。近世の刊行国絵図や地誌(たとえば『大和志』)に「チャウセン」や「朝鮮嶽」の名があったことが、現在の「頂仙岳」地名流布の一因なのであろうが、ではなぜ版行国絵図や幕府撰国絵図に「チャウセン」、「ちやうせん」の名が載せられたのであろうか³³⁾。筆者の推測では、「ちやうせん」は、「行山」の振り仮名の「きやうせん³⁴⁾」が漢字とは別に単独で読まれ、しかも「ちやうせん」と読み誤っ

た³⁵⁾ものとも考えることもできるのではなかろうか。地名に振り仮名をふるのは不自然な面もあるが、元禄図で「行山」のすぐ西隣に「ちやうせん」の名前がある(写真10)のを見ると、国絵図作成の資料とした図にはルビをふってあったのではないかと考えたくなる。

3. 版行大和国絵図への影響

さて再び、本稿の出発点であった享保版『大和国細見図』の話題に戻りたい。本稿は、『大和国細見図』に見られる地理的知識の情報源として江戸幕府撰国絵図に着目したわけであるが、記載されている文字注記の異同は、第1表のとおりである。表を見て明らかなように、『大和国細見図』は、正保国絵図ではなく、元禄国絵図とほぼ一致する。両者の違いは、表記の相違を除けば、元禄国絵図にある「吉野ヨリ大峯へ山伏道」の注記が、『大和国細見図』に見られない点だけである。文字の方向もまた、山上の行場等3カ所を除き同一である。さらに、元禄国絵図で建物が描かれた場所に、『大和国細見図』でも堂社などの絵がある。また、第1図～第3図を対照しても、山や川・道などの描き方は、正保国絵図よりも元禄国絵図の方が近い。本稿冒頭で述べたように、宝永～宝暦期の刊行国絵図については、幕府撰正保国絵図との関連が指摘されてきたが、大和国絵図の場合、大峰の範囲に関しては、明らかに元禄国絵図の影響を受けていると言えるのである。

ここで、話は若干それるが、栗田や矢守の正保図関連説についてあらためて検討しておきたい。栗田の見解を受けた矢守は、宝永～宝暦期の国絵図の特徴を次のようにまとめている³⁶⁾。

[宝永～宝暦期の板行国絵図は——小田注] 幕府撰正保図に則った図式を採るケースが多い。

すなわち郡界を黒の太線で画し、道に一里塚の記号を入れ、それが国境を越える箇所に隣国の行き先を示し、港から各地への里程を書くなどがそれである。

また、これら以外に栗田が挙げている点としては、周囲の国々を色分けで載せる、道路にいちいち距離を記入する、町村名の郭内を郡により色別にする、各郡の石高を表示する(以上、美作国の例)などがある³⁷⁾。栗田・矢守は元禄図との関係にまったく言及していないが、ここで挙げられた正保図の特徴は、実は元禄国絵図にもあてはまるものではなかろうか。本稿で扱った奈良県立奈良図書館蔵の大和国絵図の場合もそうであるし、黒田の作成した「慶長・正保・元禄国絵図の比較」の表³⁸⁾によれば、郡界、一里山、隣国の国別色分け、村形の郡別色分け、郡高記載は、正保図・元禄図ともに同じである。こうしてみると、栗田に始まる正保図関連説への疑問は大和一国だけの問題にとどまらず、元禄図も視野に入れて今後全国的に再検討の必要がある。

さて話を、元禄国絵図と享保版『大和国細見図』との比較に戻したい。両者の文字注記が、表記の相違を除けば、ほとんど同じであることは上述したとおりであるが、元禄国絵図と享保版『大和国細見図』で表記の異なる二つの地名、「シヤカ岩屋」と「セン日嶽」について次に検討する。「シヤカ岩屋」は、『大和国細見図』では、山上の「東ノゾキ」の脇にある。これは、

この絵図だけを見れば、山上に釈迦岩屋があったか、あるいは川上の釈迦岩屋³⁹⁾が誤ってここに描かれたものと解釈される。しかし、本稿での分析によって享保版『大和国細見図』への元禄国絵図の影響が明らかになった結果、「シヤカ岩屋」は「しやうの岩や」の誤写であろうと推定することができる。同様に、大峰南方の「セン日嶽」も、この絵図だけでは由来のはっきりしない山名であるが、元禄国絵図で同じ位置に描かれている「せんが嶽」の誤写であることがわかる。

以上のように、享保版『大和国細見図』における大峰の描写は、基本的に元禄国絵図に基づいていることが明らかになったが、しかし『大和国細見図』は、元禄国絵図の忠実なコピーをねらっているわけでもない。確かに地名などの文字注記については、全面的に元禄国絵図に依拠しているが、第1図と第3図を見比べればわかるように、山容から受ける印象はかなり異なっている。Ⅱ章において、『大和国細見図』では大峰が、山上～釈迦嶽間の山々のグループと、地蔵嶽を中心とする山々のグループの二つに分かれて描かれていることを指摘したが、このような極端さは元禄国絵図にはない。元禄国絵図では、山容の高低や地名配置のばらつきはあるものの、山らしい山が吉野山から玉置山まで連続している。『大和国細見図』は、名称のない山をほとんど低く描き⁴⁰⁾、結果的に、山名の付された山上～釈迦嶽間と地蔵嶽付近の山々が浮かび上がって描かれることになったのである。すなわち『大和国細見図』は、元禄国絵図をある程度デフォルメして、山容を描いていると言うことができる。その他、「西ノノゾキ」の岩の突出は元禄国絵図よりもさらに誇張されており、作者に個人的知識があったのではとも思えて興味深い。

IV. おわりに

以上本稿では、大峰に関する地理的知識の展開を考えていくうえで重要な資料のひとつである享保版『大和国細見図』と、それとの関連で江戸幕府撰大和国絵図について検討してきた。その結果、享保版『大和国細見図』における大峰の記載は、正保国絵図ではなく、元禄国絵図の地理的情報を受け継いでおり、さらにそれをデフォルメして描いていることが明らかとなった。あわせて、宝永～宝暦期の刊行国絵図は幕府撰正保国絵図と関連があるという従来の説自体も、今後再検討の必要があることを提示した。また、正保大和国絵図から元禄大和国絵図にかけては、全体として大峰の情報量が減少していること、元禄国絵図から天保国絵図にかけては、南端の紀伊国境付近の注記が書き足されていることも確認した。

もっとも本稿は、現存する幕府撰大和国絵図すべてを調査したわけではない。未見の国絵図を検討することにより、論旨の修正を迫られることもありうるが、それは今後の課題である。

また、本文中でも少し触れたが、『嘉永増補改正大和国細見図』の詳細な地理的情報が何に

よっているのかという問題も残されている。本絵図には天保国絵図と同じく「大水呑」の地名があり、そのことから、嘉永版刊行図についても幕府撰国絵図から版行国絵図へという地理的知識の広がりが見取されるのだが、それだけでは説明のつかない情報量の多さを嘉永版図は持っている。他の絵図や地誌、修験者の知識といったさまざまな要素を考慮しながら検討していく必要がある。

とりあえず本稿は、山岳聖域大峰に関する地理的知識が、幕府撰国絵図という「官」の知識から版行国絵図という「民」の知識へと社会的に伝播した一例を提示しえたところに意義があると考え、残された課題については、稿を改めて論じることにはしたい。

〔付記〕

奈良県立奈良図書館所蔵の幕府撰大和国絵図の存在を知ったのは、すでに同図の調査をされていた磯永和貴氏からの情報による。氏には厚くお礼申しあげたい。また、絵図の閲覧に際して多大の便宜をはかっていただき、写真掲載の許可をいただいた奈良県立奈良図書館郷土資料室・奈良女子大学附属図書館の関係者の方々にも謝意を表したい。なお、本研究の調査費用の一部に平成9年度駒澤大学特別研究助成金を使用した。

注

- 1) 小田匡保「山岳聖域大峰に関する地理的知識の展開」(歴史地理研究部会要旨)、人文地理42-4、1990、84-85頁。
- 2) ①栗田元次「江戸時代刊行の国郡図」、歴史地理84-2、1953、2-5頁。②矢守一彦『日本国誌資料叢書関係国絵図・大日本輿地便覧』抄・解説、講談社、1977、33頁。③矢守一彦『古地図への旅』、朝日新聞社、1992、217頁(『古地図への旅』巻末の初出誌一覧には『江戸時代図誌』の書名が挙げられているが、当該部分は実は上記②『解説』からの抄出である)。④三好唯義「南波コレクション中の刊行諸国図について」、神戸市立博物館研究紀要4、1987、27頁。宝永～宝暦期とは、近世刊行諸国図を五つの時期に区分したうちの第二期にあたる。具体例としては、和泉国、美作国、近江国、摂津国各国の絵図を栗田は挙げており、矢守・三好はこれを踏襲している。なお河内国絵図については、慶長国絵図との関連が栗田によって指摘されている。
- 3) 三好唯義「近世刊行国絵図の書誌的検討—南波コレクションを中心に—」(葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 上巻』、地人書房、1988)、216-217頁、222-223頁。
- 4) 三好論文、前掲2) ④39-40頁。
- 5) 奈良県立奈良図書館所蔵のものを閲覧した。絵図番号88、請求番号291.65-122。
- 6) これらの絵図は、南波コレクションの他、いくつかの大学図書館・公共図書館に所蔵されている。ここでは、奈良県立奈良図書館に3種類とも所蔵されていることのみ記しておく。
- 7) 識語に次のように記されている。「原図ハ享保年間中村敢耳齋ノ作、安永丙申ノ秋改正翻刻ストイヘトモ、早ヤ七十余年ノ星霜ヲ経テ磨滅少カラズ、因ニ是ヲ補ハント欲シ、寧楽玄鶴滝先生所蔵ノ図ヲ乞テ、今改刻ス

嘉永改元戊申三月 浪華積玉圃主人識」(読点は小田による)。

- 8) 『国書人名辞典 第1巻』, 岩波書店, 1993, 539頁。
- 9) 「籠所」, 「五鬼居所」, 「山伏道」など, 地名とは言えないものがある。
- 10) 実際には, 釈迦嶽と大日嶽の両山はかなり近距離に位置する。
- 11) 磯永和貴「近畿の国絵図をめぐる諸問題」, 第2回国絵図研究会発表資料(1995年11月, 於奈良県立奈良図書館)。本資料については, 奈良県立奈良図書館の山上豊氏所蔵のものを拝見させていただいた。
- 12) 奈良女子大学附属図書館のカード目録では「大和国絵図」とされている。請求番号88-120。
- 13) 川村によれば, 正保大和国絵図の絵図元は, 本多内記政勝(郡山)・植村出羽守家政(高取)・中坊長兵衛時祐(奈良奉行)の3名であった。川村博忠『国絵図』, 吉川弘文館, 1990, 76頁。
- 14) 川村によれば, 正保国絵図は正保元年の幕府要請の後, 慶安初年ごろには全国の国絵図がほぼ出揃ったとされ, 本図の慶安元年もその範囲に収まる。川村著書, 前掲13) 96頁。
- 15) 図中の郡名の脇にも郡高が記されているが, この数値は「十五郡色付之事」にあるものより少ない。たとえば吉野郡の場合, 図中には3万3109石4斗2升4合とあるが, 郡高目録では3万5958石5斗5升である。このことは, 郡高目録が後から付け加えられたものであることを示唆している。
- 16) 裏書きには「大和国絵図」とあるが, 奈良県立奈良図書館の目録には「大和国大絵図」と記されている。絵図番号146。『奈良県立奈良図書館郷土資料目録』(1979年)には旧県庁所蔵とある。
- 17) 川村によれば, 元禄大和国絵図の絵図元は, 本多能登守忠常(郡山)・植村右衛門佐家敬(高取)の2名であり, 元禄15年2月に献上されたという。川村著書, 前掲13) 121頁。
- 18) 『天保郷帳(二)・附元禄郷帳』(内閣文庫所蔵史籍叢刊56), 汲古書院, 1984。
- 19) 「大和国 九枚之内 壹番」のような通し番号が9枚それぞれの裏に付されており, 七番の裏書きに「大和大地図」とある。奈良県立奈良図書館の目録にも「大和大地図」として掲載されている。絵図番号117, 請求番号291.65-206。
- 20) 筆者の実測による。奈良県立奈良図書館作成の「絵図地図目録」では, 52×313cm とされている。
- 21) 川村によれば, 天保国絵図は天保6年(1835)に改訂作業に着手し, 同9年(1838)12月までに全国の国絵図の改訂を終えている。川村著書, 前掲13) 159頁。
- 22) 天保の国絵図改訂にあたっては, 幕府が, 縦長の等寸大に何等分かした元禄国絵図の写し(切絵図)を担当の藩に渡し, 修正の必要な箇所には薄紙をかぶせて直させる方法をとった。したがって諸藩の控図も, 切絵図の形で残ることになる。川村著書, 前掲13) 181-184頁, 196-198頁。
- 23) 道が, 西の「七色村之内 かぶち村」に分かれるところから, この名がつけられたのであろう。「かぶち村」は元禄・天保郷帳にはないが, 『大和国町村誌集』(明治24年刊)の七色集落の項に, 「鹿淵渡」, 「鹿淵」の名が見える。川井景一編『大和国町村誌』, 名著出版, 1985(復刻), 762頁。なお同じ項に, 山岳のひとつとして「野頭山」がある。
- 24) ただし, これらの国境注記は, 元禄の国絵図改訂の途中である元禄12年(1699)末以降幕府によって求められるようになった国境注記と同じ形式である。川村著書, 前掲13) 148-149頁。そうすると, 奈良県立奈良図

書館所蔵の元禄国絵図は、「元禄十式己卯年」という記載も考慮すれば、献上図以前の下絵図であり、最終的に幕府に献上した元禄国絵図には、これらの詳細な国境注記も含まれていた可能性がある。なお、伊勢・伊賀など他の国境については、奈良県立奈良図書館所蔵の元禄図でも注記が多く見られる。また正保図では、天保図ほどではないが、紀伊国境についても注記がある。

- 25) 山上の行場のひとつ。
- 26) 山上の南，小笹の西に書かれており，七十五靡としての位置とは合わない。
- 27) 「小釈迦嵩」，「子稻嵩」とも，現在どの山に相当するか不明である。
- 28) 現在の行仙岳中腹の行仙宿。
- 29) 「天狗嵩」は，国土地理院の地形図上に現在記載されている前鬼近くの「天狗山」ではなく，寺垣内集落西方の行仙岳ではないかと筆者は考えている。正保図上の位置からは笠捨山の可能性もあるが，「大峯四十二宿地」の「第三十一 行仙の宿り」の項には，「此宿は北山寺垣(ママ)の領分にて段々登り，天狗嶽あり」(傍点小田)と記され，次に千ヶ嶽(笠捨)の項に続く。米川千秋編『大峯山』，吉野熊野国立公園協会奈良県支部，1944，170頁。
- 30) 第1表には含めなかったが，山上～洞川間の距離である「原八十丁」という注記も，元禄図では消えている。川村によれば，道のりなどの道筋注記は，元禄国絵図では簡略化されているという。川村著書，前掲13) 150-151頁。
- 31) 「釈迦ノ嶽」のすぐ北東に書かれており，現在の位置とは合わない。
- 32) 小田匡保「山岳聖域大峰における75霊地観の成立とその意義」，人文地理41-6，1989，32頁の第1表参照のこと。
- 33) ひとつの仮説としては，「朝鮮嶽」が「チヤウセン」と読まれ，絵図に書き入れられたとも考えられるが，「朝鮮嶽」の初出である『大和志』は，元禄国絵図や享保版『大和国細見図』よりも後の刊行であるうえ，「朝鮮」の歴史的仮名遣いは「テウセン」であるから，この説は苦しい。むしろ逆に，『大和志』が国絵図中の「チヤウセン」を「朝鮮嶽」に置き換えたとみるのが自然であろう(ただし，『大和志』では「朝鮮嶽」を稲邑嶽の西南と記しており，位置関係は国絵図と合わないのであるが)。
- 34) 「行」の字の歴史的仮名遣いは「ギヤウ」である。
- 35) 「き」の変体仮名である「起」あるいは「支」のくずしを「ち」と読み誤る可能性はあるだろう。
- 36) 矢守著書，前掲注2) ③217頁。
- 37) 栗田論文，前掲注2) ①4頁。
- 38) 黒田日出男「国絵図」(『日本史大事典 第二巻』，平凡社，1993)，1026頁。
- 39) たとえば，『大和志』に「釈迦岩窟 在和田村」とある。奈良県史料刊行会編『大和名所和歌集・大和志他』，豊住書店，1978(復刻)，340頁。
- 40) 「七面」も山と見なされなかったのか，低山になっている。また「御山」は，何を指しているのかはっきりしない書き方になっている。

**The Omine Mts. Painted on Pictorial Maps of Yamato Province
in the Edo Period:
An Example of the Propagation of Geographical Knowledge
about the Sacred Mountain Area**

Masayasu ODA*

The Omine Mts. in Yamato Province, central Japan, have been a sacred area for a Japanese mountain religion, *shugendo*. Laymen have known, however, their geographical features and place names as well as religious ceremonies to some extent. Geographical knowledge of the common people about the sacred mountain area is an interesting study subject.

The author supposes that pictorial maps reflect geographical knowledge of the people. This paper takes up the Omine Mts. drawn on a pictorial map of Yamato Province printed in 1735 by a private publisher, and investigates the source with special reference to provincial pictorial maps by the Tokugawa Shogunate. In addition, it examines the content of three official pictorial maps, since they attract attention of some researchers recently.

The findings obtained are as follows:

First, the description of the Omine Mts. on a pictorial map Yamato Province in 1735 draws on the official pictorial map made in 1699. Although some researchers have argued that provincial pictorial maps printed in the first half of the eighteenth century are connected with the official pictorial map painted in the mid-seventeenth century, it does not apply to this case. Further, this opinion needs to be reexamined from all sides by comparing printed maps during that time with official maps made about 1700.

Secondly, as a result of making a comparison among three official pictorial maps of Yamato Province, it made clear that the description on the map in 1699 is simpler than the map in 1648, and some place-names are added on the map about 1838.

The first finding mentioned above shows an example of the social propagation of geographical knowledge about the sacred mountain from the government to the common people.